

耕種農家 須戸和司さん(73)
(新潟県三条市)

酪農家 安済仁さん(51)
(群馬県吾妻郡)

乳用牛を約200頭を飼養している(令和7年度)。スマート酪農を進め、効率化した酪農経営に取り組んでいる。令和7年度から須戸氏の稲WCSを購入している。

(株)中越スパローズ代表。所有の田んぼと、地域の離農者の田んぼを引継ぎ、約74haにて、稲WCS・食用米・大豆等を生産している(令和7年度)。令和5年度から、稲WCSを生産を開始した。



北陸農政局畜産課は、新潟県で稲WCSを生産する須戸氏と、その稲WCSを利用する群馬県の酪農家の安済氏に、稲WCS供給契約に至った経緯等についてお話を伺いました。

★二人がマッチングしたきっかけ

マッチングのきっかけは、新潟県を訪れていた安済氏が、稲WCSの刈取りをしていた須戸氏の作業風景を偶然見かけたこと。「稲をシュレッダーモア

(※)で刈取って何をしているんだらう」と一時間ほど眺めていた安済氏に、須戸氏が声をかけた。当時は須戸氏の稲WCSの販売量に空きはなく、「いくつかの縁があるといいですね」と話し、名刺交換のみで終わった。それからしばらく経って、須戸氏は、稲WCS供給先の畜産農家一軒が離農したため、新たな供給先を探していたところ、たまたま耕畜連携マッチングのリストに安済氏の名前を見つけ

たことで、須戸氏の方から連絡をとり、契約に至った。

また、安済氏は、輸入飼料に加え、自給しているデントコーンや購入の群馬県内産の稲WCSだけでは、給与量が不足気味と感じていたところ、耕畜連携マッチングについて農協経由で案内があり登録していた。マッチングの経緯について「アークシヨンを起こすことで縁が繋がった。このマッチングは国が後押ししているから信用できる。もっと広まってほしい。」と安済氏、須戸氏は話す。

※たくさんのハンマーナイフが回転し、牧草を叩きながら細断する機械

★マッチングして良かったこと

須戸氏と安済氏は5年の契約をしている。長期契約により、須戸氏にとっては、ほ場の規模拡大に対応するための作期分散や従業員の手配が楽になるというメリットがある。安済氏にとっては、近年の物価高の中、顔の見える生産者と契約でき、安定した量と価格で国産飼料が、

「耕畜連携マッチング」とは

農林水産省では都道府県と連携し、飼料作物の耕種農家の供給と畜産農家の需要とを結び付けるため、全国の需要者および需要量を掲載しています。

●参加メリット

国産飼料・たい肥の供給先および供給元を見つけられます。また、直接契約により販売価格を決定できます。

→ 耕畜連携ポータルサイト: 農林水産省

入手できる。
 加えて、直接契約だからこそ
 双方が協議し、納得できる取引方
 法と条件で、価格を決めることが
 できた。

★受け渡し方法について

安済氏が10tトラックを運転し、
 須戸氏のほ場に置かれたロールを
 取りに行く。予め運んでおいた安
 済氏のバールグラブでロールをト
 ラックに積み、牧場へ持ち帰る。
 片道約130km、積み込み時間込
 みで往復約12時間かけて牧場まで
 運ぶ。令和7年度は、トラック2
 台を使い約10往復し、約600個
 を購入した。安済氏は、搾乳口
 ボットの導入で牧場での作業時間
 の短縮ができていたこと、また、
 トラックを所有していたため、輸
 送に時間を割くことができた。

★課題について

現在の輸送方法では、労力・費
 用コストが大きいことが課題だと
 二人は感じている。ロールを一ヶ
 所にまとめた場所ですトラックに積
 み込めるようなヤードを作ること

例えば、令和7年度分に生産した
 ものでは、安済氏の牧場は標高
 が高いため、稲WCSの水分量が
 高いと冬期には凍ってしまうこと
 が分かった。そこで、令和8年分
 からは、水分量を落とすために、
 収穫後の乾燥時間を長くすることに
 対応する。

★終わりに

現在、我が国の飼料自給率は、
 約25%と決して高いとは言えない
 状況です。畜産農家が給与する飼
 料をなるべく国産飼料で賄うこと、
 農地を維持していくことなどが重
 要です。

そのためには、国産飼料を安定
 的に生産・利用できる体制の確立
 が必要です。そこで、耕畜連携
 マッチングの活用として、本事例
 がご参考になれば幸いです。

★耕畜連携マッチング気になる方

売りたい買いたい方はこちらから

「ここをクリックすると、問い合わせ
 先が表示されます」

ができれば、効率があがるのでは
 と考えている
 今後としては、サイレージの発酵
 を待つてからの受渡しではなく刈
 取り後、順次輸送する方法や、群
 馬県から新潟県へ荷物を運ぶ運送
 業者の帰りの便で運んでもらう方
 法等を検討している。

★稲WCS生産について

須戸さんは、令和5年から稲W
 CS生産を始め、コシヒカリと稲
 WCS専用品種つきはやかを利用
 している。栄養があり、もみが入
 りにくい出穂直前7月末から8月
 上旬にかけて、シュレッダーモア
 を使い、10〜15cmの長さになるよ
 う叩き切つて刈取る。その後、集
 草反転を行い水分量を調整し、乳
 酸菌を添加してロール状のサイ
 レージにする。

出来上がったロールは、成分分
 析して販売、酪農家との意見交換
 も行い、各農家の要望に合わせた
 品質で提供できるように取り組ん
 でいる。農家ごとにほ場を割り当
 て、稲WCSを生産する工夫をしてい
 る。

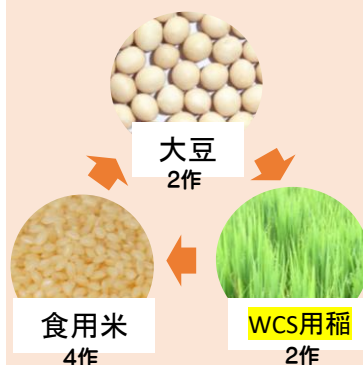


(左) 保管のため、安済氏がさらにラッピングしピンクのロールに。(中央) 品質について定期的な
 意見交換。(右) もみが少なく消化性が良い、牛の食いつぶりもとても良い。



8月上旬、つきはやか刈取り直前のほ場の様子。食用米・大豆・WCS用稲の輪作により、ほ場の
 水はけが良くなり、落水後3日間ほどで機械が入れるため、適期収穫が可能。

須戸氏の輪作体系



須戸氏は、ほ場の大区画化、作業機械の大
 型化のため、ほ場の支持力改善を目指し、水
 はけを良くする大豆を作付している。その後、
 WCS用稲を作付すると、作業分散できる上、
 土壤の過剰な窒素はWCS用稲の栄養になり、
 食用米の倒伏を防ぐことができる。
 経営面積が拡大する中、円滑な土壤改良を
 続けることができる。将来的に少人数でも、
 効率的な農作業が可能となり、地域の農地を
 耕作放棄とせず、農地を守ることができます。